

広島市特別名誉市民バーバラ・レイノルズ記念碑

碑銘選定の経緯

序

書に携わる者として碑の文字の揮毫を依頼されることは多々ある。

碑の文字内容とか立地等に配慮して表現も相応しい表現を考えはするが、大方は筆者は脇役である。

勿論、そうばかりではない。ヒロシマの碑で有名なのは広島大学教授賀健義氏の文、揮毫になる「安らかに眠って下さい、過ちは繰り返しませぬから」であろう。

これはいわゆる原爆論争ともなり、インドのパール博士が「過ちは繰り返さずと懺悔すべきは、原爆を投下した者たちではないか」と批判した。結果、これは全人類の誓いの言葉と考えて今に至っているのではないか。

さほどに碑文の選定ということの難しさを、今回、体験させられた。その経緯を述べたい。

森 下 弘

一、バーバラ・レイノルズ記念碑建立のスタート

広島市に貢献のあった人に与えられる広島市特別名誉市民の称号、その受称者ノーマン・カズンズ氏とジュノー博士の碑はすでに存在する。

(ノーマン・カズンズ氏 原爆孤児の精神養子運動
原爆乙女の渡米治療などに貢献、ジュノー博士 原爆投下直後国際赤十字より医薬品を携え、被爆者治療に貢献)

ところが今一人、米国人でありながら、被爆者のため、そしてまた広島市民の願いを自らの願いとして、反核、平和運動に生涯を捧げた、バーバラ・レイノルズさん、そしてヒロシマと世界を結ぶ架け橋、国際交流の拠り所としてワールド・フレンドシップ・センターを創設した

同女の碑はまだ無い。

その彼女の碑建立の話が無かった訳ではない。

バーバラさん（一九一五〜一九九〇）の生前、バーバラさんとともに、センターを支えてきた、センターの前理事長原田東岷先生、先生はバーバラさんの碑を建立したという思いを長年抱いておられたが、バーバラはそれを受け入れなかったという。

先生の没後、それはそのまま沙汰やみになっていた。その話が持ちかけられたのは今から五年前「ヒロシマ平和巡礼」―バーバラの生涯―の著者kさんからである。

平和公園にノーマン・カズンズ氏、ジュノー博士と同じ特別名誉市民であるバーバラの碑が無いのは納得出来ないとして、皆の発心を促した。

ヒロシマのために尽くしたバーバラさんを愛すること、賞揚することに誰も異存はない。

しかしバーバラさんの人柄、心情、平和に献身し、人のために与えて、要るものは神様が持って来て下さる、と自らは何一つ私物化することの無かった彼女、死に臨んでも、「自分の灰は故郷オハイオに撒いてほしい、それは川から、そして海へと流れ、世界に連なっていくから」と語っていたという彼女。

碑など造るといふことは彼女の意に沿わない、彼女が望んだりしない事なのではないか、という思いが、私を含めて、無かったとは言えない。

その状況を一歩前へ進めたのは、被爆教師として熱心

に平和教育に取り組み、またワールド・フレンドシップ・センターのメンバーでもあるSさんの、碑を体験継承の縁（よすが）にしたいという思いの発言であった。それは同じ被爆教師である私たちも納得のいくことであつた。

そうして思いが定まると、事は容易に進むと思われた。石材はすでに提供者があり、刻む碑文はフレンドシップ・センターに常時掲げられていて、出入りする人々の口に膾炙されていた、

「私もまた被爆者です」

“I am a hibakusha too” (Barbara Reinords)
と、自然に、思われていた。

二、意見百出

ところが碑建設提案に対し、（碑の建設そのものへの意見も含めて）部内外、国内外（フレンドシップ・センターにはボランティア元館長たちでセンターをサポートする在米アメリカ委員会などがある）、そして、長崎のメンバーからも、実に様々な意見が出て来た。

1、まず、碑建設よりも、そのエネルギーや資金を、バーバラの意志を生かして活動しているセンターの活動そのものに向けるべきだ。活動（の継続）そのそのものが何よりの碑である。という意見。

2、また市民、職員の中ですら、「バーバラさんも被爆

者ですか？」という素朴な質問が出てくることもあった。

3、I 'too, am a Hibakusha & tooを強調すべきだ、と。

4、このままでは、これは被爆者の碑ではないか。バーバラは優しいけど、強い意志で平和活動に挺身した崇高な精神を持った人だ。

No more Hiroshima, No more war

「ここそ記されるべきだ」と。これはかなり強硬な主張で、最後まで顧慮しなければならなかった。

「No more Hiroshima については、二度と繰り返すな」の意。

No more Hiroshima, s
であるべきだとも言われていて、思案のしどころである。

ところで、ただ

「ノーモア ヒロシマ」はすでに広く定着して使われているが、最初にこの言葉を発したのは、原爆乙女の治療に尽力した、流川教会の故谷本 清牧師だとも言われており、その娘さんに真偽を質すが、解らない、しかしそれが他の碑に使われるのは嬉しくないという。

それに、公園内にも「ノーモア ヒロシマ」の碑が存在する。

その他、

5、バーバラ、被爆者、に加えて、彼女の志を具現してしているセンターの活動を紹介して欲しいという館長やメンバー等の意見など、様々である。

三、家族の思い

ところで平和公園内への新しい碑の建立は原則認められていない。その傍らの「緑地帯」であっても市への申請認可が必要だが、事はそれ以前の問題であり、その碑文選定のために、(そのうちに被爆者はいなくなるかも知れないと思うほどに)以後随分の期日を要した。

このあたりで、在米のバーバラの家族、息子、娘たちの意見を聞く。

息子テッドは「母は何時も私もまた被爆者だと言っていた。バーバラのための碑でなく、被爆者の碑であるなら結構である。」と答えて来た。

それらを受けて、合議を続ける。

折しもたまたま用意した石に、将来、ヒビが生じる可能性があることが指摘され、素材、デザインも含めてゼロからフリーで検討することにする。

ここで公募の話も出たが、これだけ問題のあるものを外部の若い人人に真に理解できるだろうかと沙汰やみになった。

四、解説文

その間、バーバラのことを知らない、修学旅行生達にも理解できるように、砕いた説明の碑文が委員会で用意された。

アメリカ人でありながら、ヒロシマのため世界平和のために働く事を天命と受け止め、生涯を捧げたバーバラ・レイノルズさん。彼女は、被爆者が悲惨・苦悩・憎しみを越えて平和を願う姿に深く共感し、強い意思で彼らを支え、核兵器廃絶を訴え続けました。ヨット・フェニックス号でハワイ沖の核実験場に抗議に乗り込み、被爆者と共に世界各地を訪問し、平和使節を送り出すなど、数々の功績により、一九八五年、広島市特別名誉市民に選ばれました。また、一九六〇年、バーバラさんは、平和活動の拠点として、広島にワールド・フレンドシップ・センターを設立し、人と人との理解を深める事こそが平和を創る基本であるという理念のもと、今もなお、その活動と実践が続けられています。核兵器廃絶に向けた彼女の働きが、未来に生きる若い世代に継承されることを願って比の碑を建立します。

それを刻んだ大理石の欧米風モニュメントのデザインも試みた。

しかしこれだけの長文、誰がそれら全部を読んでくれるだろうか。

想を全く転じて「世界友愛の碑」と、タイトルしてみるのが、インパクトが無い。

五、バーバラ資料

(とところで) 一番いいのはバーバラ自身の適切な言葉があれば一番良い。それらを含めて、あらゆる資料にあたる。

県、市、大学の図書館、公文書館、平和研究室、原爆資料館、新聞社(記事)、センターの記録等、資料探しを続ける。

その間、センター自体の、NPO法人移行(二〇〇八年)、創立四五周年記念行事(二〇〇九年)、広島一中三年生原爆体験記録のデータベース作り(二〇一〇年)等と並行、時間も経過する。

この段階で広島市との折衝にも入る。

広島市の平和公園内に碑を建立することはすでに久しく認められていない。今回建立申請するのは、平和公園とその南、平和大通りの間の緑地帯、(ノーマン・カズンズ記念碑なども同所)、しかし費目上は公の道路である。建立の趣意、目的はもとより、さまざまな認定、道

路上交通上の規制、文化施設としての文化庁への申請、認定、景観、デザイン等々、そして有識者会議など様々な制約をクリヤーしなければならぬ。

申請から一年はかかり、それから募金、着工、ということになる。

しかし、何よりも、碑文、デザインの選定が決まらないことには先に進まない。碑文選定に話を戻す。

引き続き諸資料に当たりながら試行する。

で、最初の、

私もまた被爆者です

I 'foos am a hibakusha

であるが、その意は単に、

私も原爆に遭った者

I am a Hibakusha

ではなく

私は、原爆を投下した国、アメリカの国民であるにもかかわらず、非人道的な原爆による被害者、ヒバクシャ(の一員)にはかなならぬ、という逆説的な意味合いのものである。

その抛って来るところは

(一)

一九八九年のクリスマス、平和公園で平和を祈って断食中のバーバラさんに、原田東眠先生(『FC』名誉理事長)が語りかけた、

「いまなにを考えているの?」、問いに対し、バーバラさんが「私も被爆者なのです」とポツリと言った。というエピソードである。

「バーバラはもつと謙虚だったのかも知れない。(ヒバクシャはみんな苦しんでいる。あるいは苦しみを乗り越えて来た。その上で、地上の人々すべてに平安があるように祈ってくれている現代の予言者だったと言っている。私もヒバクシャと一緒に苦しまなければ、真の助けびとはなれないのだ」と考えていたのではなからうか。(先生著「平和の瞬間」)と。

(二)

被爆三十年(一九七七年)NOシンポの、「私たち(人類)はみんな(ヒロシマ、ナガサキの人々と同じ)ヒバクシャです」というアピールは、シンポジウムの裏方にいたバーバラさんの提言が反映したと言われる。そしてまた、

(三)

被爆39年を前にロングビーチでの「どんな時でも日本のヒバクシャのことを忘れたことはありません。それが私の平和運動のスタートであり、すべてなのですから」という発言、(一九八六、七、二八、共同)などである。

(四)

そしてまた、彼女のヒロシマに寄せる思い、反核、反戦の強い願いは、

一九七五（被爆三〇周年）年、ヒロシマ特別名誉市民
賞受賞時の謝辞、

「自分の心は広島市民とともにあるという気持でやってきました。わたしの心はいつも、広島市民だという気持ちでいました」などに受け取れる。

そして更には、
(五)

「人類が永遠に戦争と戦争の準備を拒絶するよう祈ります。」（一九八五年広島市訪問時、原爆資料館で記帳したメッセージ）にはより踏み込んだ反戦への願い、祈りが込められている。

六、バーバラという人

それらさまざまな彼女の発言、思い、願いを合わせて碑文の検討を進め、碑建立委員が原案を作成しては理事会で討議する。（といっても、バーバラの生前を知り、彼女と直接接したことの有る者はだんだん少なくなっていて、いきおい私の関わるが多かった。

碑文の案とともにデザインも併せて提示する。

同時に、英文への翻訳も試みなければならぬし、外人のメンバーや役員からは文法的なこと指摘が出てきたり、と、なる、そこは様々な意見が出て来、討議は幾度となく繰り返えされ、延々と続けられる。そこでつくづくと感じさせられたのは、

(一) バーバラの語った言葉や記述したものは多々あるが、決定的なものがどうしても見いだせない。

(二) 彼女の思いを踏まえて、私たちで碑文創造を試みるがやはり決定的なものにならない。

(三) 「群盲象を撫でる」という譬えがあるが、ふとそんなことを思ったり、バーバラが我々で推しはかること事の出来ないほど、いかに優れて立派で、深遠な存在ではないかと思ったりもする。

七、碑文決定

さらに加えて、

「私も被曝者です」

I "Too, am a Hibakusha.

の意を、解りやすく誤解なく、受け入れてもらうためにどのような語句を添えればいいのか。

さきに引用した、「私の心は何時もヒロシマとともにあります」を添えることにする。

ここで、再度あらためて経過を報告し、家族の意見を求める。

娘のジェシカから、

Hibakusha - they are the inspiration to all my
peace efforts

My heart is always With Hiroshima

とじて欲しいと言いつつ。

Peace efforts

を具体化するために

「人類が永遠に戦争と戦争の準備を拒絶するよう祈ります。」(一九八五年広島市訪問時、原爆資料館で彼女が記帳したメッセージ)、

も顧慮するが、戦争の準備 preparation、まで踏み込むなら、核廃絶、をも入れたい。などと論議するが、

結果、やはりシンプルなことが一番ということに落ち着き、ジェシカの案に戻す。

しかしその翻訳でまた戸惑う。

Inspiration 214

バーバラの敬虔な信仰心に相応しい語だが、靈感、叡智、どう訳すか？

だがもはや逐語訳することはない。

私の心は いつも

ヒバクシャ

ヒロシマ

とともにあります

と決める。

そしてデザインも

「私もまた被爆者です」の文字(森下揮毫)とバーバラの慈愛に満ちた顔写真をポイントとし、余白を、大きく取ったすっきりしたものに、

九、碑の建立と序幕

昨年(2011)四月、広島市からの認可が正式に下り、それから二カ月余、碑の制作(黒御影の台に、碑銘を記したセラミック陶板をはめ込む)、設置、それに、併せて募金活動と大忙殺。六月十二日、バーバラの誕生日、土砂降りの雨の中だったが、市長、バーバラの家族、等、関係者参列の下、無事碑の除幕を終えた。

